三枝康高著

昭和文学史の論点

―近代と反近代の系譜―

桜楓社

著者略歴
三枝康高（さえぐさ やすたか）

大正6年，神奈川県横須賀市生まれ。
昭和18年，東京大学国文学科卒業。昭和20年同大学院修了。専修大学，静岡第一師範学校教授をへて，現在静岡大学教授。
現住所，静岡市上足洗1丁目8～56～7

検印
省略

昭和文学史の論点

昭和四十九年四月一日　初版印刷
昭和四十九年四月五日　初版発行

定価　一八〇〇円

著者　三枝康高
発行者　及川篤二
印刷所　㈲共信社

101 東京都千代田区猿楽町二―二―六
㈱桜楓社
（電話）（〇三）二九一―五六六一
（振替）東京　一八〇二〇

3091―740310―0723

昭和文学史の論点

目次

I

昭和文学史の論点……九
戦前の文学と文学運動……九
十五年戦争と文学……一三
戦後文学とその方法……一四
私小説と私小説論への批判……一六
私小説と私小説論の沿革……一六
近代小説における「私」……二四
『放蕩息子の帰宅』……三一
『暗夜行路』の運命観……三六
『暗夜行路』とその評価……三六
成立の事情と運命観……三八
後篇についての問題……四四
谷崎潤一郎と佐藤春夫……五三
谷崎潤一郎と日本の古典……五三
ロマン主義者、佐藤春夫……五九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

Ⅱ

『夜明け前』と維新文学……六七
明治維新と昭和維新……六七
戦後における維新文学……七八
川端康成の人と文学……八九
日本の美しさと川端文学……八九
精神人としての川端康成……九二
保田与重郎と川端康成……九五
『弥生の三日月』から……九五
保田の『川端康成論』……一〇〇
イロニイの成立……一〇四
美と伝統のふるさと……一〇九
美と伝統の意味……一〇九
大和古寺と中世の美……一一〇
日本的なものへの回帰……一一三

Ⅲ

十二月八日の思想……一一九
十二月八日の記録……一一九
『宣戦の詔書』と総力戦……一二五
永久戦争と終戦……一二七
昭和作家としての太宰治……一三五
太宰治と昭和時代……一三五
左翼運動とキリスト教……一三六
坂口安吾の戯作精神……一四二
ファルス『風博士』……一四二
『風人録』と『金銭無情』……一五二
『安吾巷談』への変貌……一六〇
戦後文学の新しい視点……一六六
『近代文学』派と平野謙……一六六
純文学はどう変質したか……一七二
文学史のなかの戦争……一八〇

正統国学と三島由紀夫……一八七
三島の『憲法第九条』解釈……一八七
自衛隊への批判と憤激……一九〇
二・二六事件と神風連……一九三
あとがき……一九七
三枝康高著作年譜……二〇二

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

昭和文学史の論点

戦前の文学と文学運動

昭和文学を伝統的リアリズムとそれを技法的に革新しようとするモダニズム文学、さらにそれをイデオロギー的に克服しようとするプロレタリア文学運動の三派鼎立とみる説がある。それは平野謙の唱導するところで、図式的な平易さはあるが、三派のそれぞれを発生的ないしはダイナミックにとらえていない憾みがある。戦前の文学の最初に位置すべきものは、モダニズム文学である。それは震災後の文学としての新しさをもっていたが、文学にかぎらず、アヴァンギャルドの芸術運動が、わが国ではこの時期に受け容れられたのである。第一次大戦直後の廃墟と化したヨーロッパに発生したこの運動は、これまでに類を見ないデフォルメを伴なっていたが、そのような変態異常な技法は、これと類似した震災後の荒廃のなかではじめて共感を呼んだといってよい。

関東大震災はこのように、大正十二年九月一日、東京を壊滅させることによって、日本文化の根底までも揺るがす大事件となった。その被害は江戸時代このかた伝えられてきた文化遺産が烏有に帰したことに、とくに顕著なものがあったが、それまでの文化の担当者に自信を喪失させたことを、さらに大きな影響として挙げなければならない。たとえば菊池寛は『災後雑感』でこういっている。「生死の境に於ては、ただ寝食の外必要なものはない。食

うことと寝ることだ。……むろん、こうした寝食丈の人生が、人生の凡てではないだろう。が、しかしそれはたしかに人生の究極の相である。究極の人生に芸術が、無用の長物であると云うことは、我々に取っては、何とも不愉快な真実である。我々の仕事に対して信念を失ったことは、第一の被害である。」これが当時『文芸春秋』の主宰者であり、ブルジョア文壇の代表作家と目されていた人物の言葉であった。

すでにして大正十二年一月、菊池の『文芸春秋』に集まった若い作家たちは、千葉亀雄によって「新感覚派」と命名され、かれらもまたその称呼を受けいれて、十三年十月に金星堂書店から発行された『文芸時代』によった。かくて新感覚派の作家たちは、明治時代の人物のように儒教的な形式倫理をもたず、人間の本性に原始の本能をみて真実とする自然主義や、大げさな「人類の意志」といった発想で内在神を認める『白樺』派とは異なり、非人間的に技術化された生活条件によって、物質の世界へ向かって人間性が解体していくという意識を共通に分ちもっていた。それは関東大震災によって決定的なものとなり、その後の虚脱状態に、アメリカ資本による工業力が移入されて、精神的な不安定に裏打ちされた軽薄で享楽的なムードが蔓延していった。すなわち自動車・映画に象徴されるメカニズム、カフェーに代表される消費的なモダニズムとその日常化が、新時代の尖端をいくものとして小市民の生活を彩ることとなった。横光利一の『日輪』以後の作品や、川端康成の『浅草紅団』などをその代表作として挙げることができる。

ふつう文学史では、新感覚派についで新興芸術派の運動を挙げるのが常識とされているが、新興芸術派なるものは、実際はプロレタリア文学に対抗する作家たちの集まりにすぎず、必ずしも共通の意識をもった流派とはいえない。すなわち『文芸時代』に対抗すべく『不同調』を刊行して、「新人生派」の名の下に糾合した尾崎士郎らに、いわゆる新感覚派の一部を加え、さらに『近代生活』などの同人雑誌に所属する人たちをも吸収し、竜胆寺雄の主

唱によって、昭和五年五月に新興芸術派が組織された。これには『聖家族』の堀辰雄や『檸檬』の梶井基次郎、『山椒魚』の井伏鱒二に、小林秀雄、伊藤整、阿部知二など海外文学の移入を試みた人たちをも含んでいる。かくてジェイムス・ジョイスの「意識の流れ」や、レーモン・ラディゲの「内的独白」に触発された新心理主義の文学が、当時の新風を形づくるにいたるのである。

さて第一次大戦で火事場泥棒的なぼろ儲けの繁栄を迎えた日本経済は、「成金」の夢もつかのま、大正九年には早くも恐慌に見舞われ、その後も慢性的な不況状態が続いたまま昭和にはいった。しかも昭和二年三月から四月にかけてはげしい金融恐慌が起こり、二流銀行の休業、中小企業の倒産が相つぎ、資金難からいっそうその没落を早めた。さらにこの時期になって金解禁を断行したわが国に、世界恐慌の波が不気味におし寄せ、その打撃は他の資本主義国とでは、比較にならぬほどひどいものとなった。しかも恐慌の負担はそっくり労働者の肩にかぶせられて、賃金は減少の一途をたどり、大量首切りのため失業者は急激した。そのうえかれらが帰農した農村は、昭和五年の深刻な豊作飢饉につづいて、翌六年には大凶作となった。かくて労働運動、農民運動ともに異常なたかまりを見せ、争議件数、参加人員数の増加とともに、革命を目ざす政治闘争への激化がはっきりと示されるようになった。

すでにして『種蒔く人』の創刊によって口火を切った文学運動は、しだいに理論的な尖鋭化を見せ、『文芸戦線』における青野季吉の『自然生長と目的意識』などの指導的発言は、この運動にとって画期的なものとされた。かくて分裂を重ねた文学運動もようやく統一の機運を生じ、昭和三年三月十五日の大検挙（三・一五事件）によって、かえってプロレタリアの運動としての自覚をもつにいたったのである。すなわちこの年結成された全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）は、その傘下に日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）、日本プロレタリア劇場同盟（プロッ

ト)、日本プロレタリア映画同盟(プロキノ)などの各団体を擁し、機関誌『戦旗』の活動もきわめて活潑であった。この時代に理論的指導の役割を果たしたのは蔵原惟人で、かれの書いた『ナップ芸術家の新しい任務』は当時指標とされた。その路線のうえにあって、小林多喜二は『蟹工船』や『不在地主』を書き、徳永直は『太陽のない街』を書いたのである。

すでに昭和六年十一月に成立した日本プロレタリア文化連盟(コップ)は、蔵原の提唱に基づいて工場農村のサークル組織を基底とし、ナップを含む左翼的文化団体を、ピラミッド型の連盟体に改組しようとしたものだが、七年三月以降官憲の暴圧のもとに、衰滅の一路をたどらざるをえなかった。翌四月、出獄した林房雄は『作家のために』を発表して、作家が文学活動に赴くべきゆえんを説き、昭和九年三月、作家同盟(ナルプ)が解散すると、転向作家が続出する結果をさし招いた。島木健作の『再建』が発禁処分にあい、昭和十二年になって書いた『生活の探求』は、それ以前の「心ならざる転向」にたいして、「心からの転向」を表明したものとされた。

十五年戦争と文学

昭和六年九月、関東軍は満州事変をひき起こしたのち、満州国という新国家をつくりあげたが、十二年七月には北京郊外で日本の駐屯軍と中国軍との間に衝突が起こり、やがてそれが日中戦争へ発展するのである。その間昭和七年には五・一五事件が起こって、海軍の青年将校たちが犬養首相を暗殺し、昭和十一年には二・二六事件を生じて、陸軍の将校たちは歩兵第一・第三連隊、近衛歩第三連隊の下士官や兵を動かし、首相以下内大臣、侍従長などを射殺した。すでに「文芸復興期」という美名のもとに、昭和八年十月に『文学界』を創刊した文壇では、これと

ほぼ同じ時期に『文芸』（改造社）と『行動』（紀伊国屋）をも刊行した。さらに昭和十年三月に『日本浪曼派』、翌十一年三月には『人民文庫』が出されて、若い世代の拠点とされた。

このような文運の隆盛と見合って、既成作家の制作も目だち、とくに島崎藤村は昭和十年十月に『夜明け前』の大作を完成し、志賀直哉は十二年四月に『暗夜行路』を書きあげた。かくて小林秀雄の『私小説論』、横光の『純粋小説論』などの提唱により、「純文学にして通俗小説」という主張のゆくてに、風俗小説という新しいジャンルが生みだされた。すなわち横光の『家族会議』に続いて武田麟太郎は『銀座八丁』を、高見順は『如何なる星の下に』を書いて、新風をまき起こしたが、石坂洋次郎、石川達三、丹羽文雄のような筆力豊かな作家たちもまた、この時期に輩出した。すでにわが国を「大東亜共栄圏」の盟主とする構想も世に行なわれ、出版ブームも軍需景気に煽られた経済界に乗じてかなりののびを示したのである。風俗小説がやがて国策文学に赴き、素材派と称する時局的な傾向を示すにいたったのも、まことに理の当然としなければならぬところである。

すなわちジャーナリズムは、従軍作家の戦記やルポルタージュをもって時局に応じようとし、火野葦平の『麦と兵隊』を皮切りに、上田広の『黄塵』や日比野士朗の『呉淞クリーク』などが世評をよんだ。これと前後して農民文学、生産文学、海洋文学、大陸文学などの肩書文学が横行し、浅野晃によって『国民文学論』が主張されて、文壇はしだいに右翼的な言動を許すことになった。林の『青年』、本庄陸男の『石狩川』をはじめとして歴史小説がさかんに行なわれ、「系譜もの」と呼ばれる作風も一般化す風潮であった。やがて昭和十六年十二月、日本は米英蘭の諸国に宣戦を布告して、いわゆる「太平洋戦争」に突入した。すなわち「文学報国会」が組織され、多数の文学者、思想家たちは占領地域の文化工作隊や報道班員として現地に派遣された。一方『文学界』の同人たちは京都学派の哲学者たちとともに、『近代の超克』を討論して、知的協力会議を主催した。このような困難な状況下にあ

ってもなお、上林暁、伊藤整らによる小説の芸術派的な制作もあり、川端の『雪国』や堀の『風立ちぬ』も発表されたが、雑誌の休刊、言論を一元化するための弾圧によって、戦争末期には文壇もまた空白化せざるをえなかった。

戦後文学とその方法

昭和二十年八月、日本政府は連合国にたいして無条件降伏を行なった。敗戦を機としてわが国の政治、社会に起こった変革は、戦時の統制下に圧えつけられていたいっさいが解放されただけでなく、「ポツダム宣言」の受諾にしたがい、新しい理念としての民主主義により、国民みずからの立ちあがりを意味すべきものであった。その意味で戦後の文学を、文芸復興期とされた昭和十年前後に結びつけ、戦中の時期を空白とする見解がある。それは『近代文学』派の人たちや伊藤整らの考え方によるものであるが、わたしは必ずしもそれに賛成するものではない。私見によれば戦後の文学にとって最も重要な問題は、それが戦争をどう受けとめたかということにあるはずで、それを不問に付した戦後などというものは考えられぬである。

昭和二十一年には雑誌の復刊や創刊が目だち、既成作家がほとんどひとり残らず仕事をはじめたから、力のこもった問題作がいくつも現われた。しかも闇屋、パンパン、戦争未亡人などが横行し、賭博やダンス、性的遊戯などにうち興ずる世相は、作家たちに無限の素材を提供し、新戯作派または無頼派と称する作家たちが、こうした状況を反映して目だった作風を示した。すなわち『堕落論』『白痴』の坂口安吾、『世相』『土曜夫人』の織田作之助、『如是我聞』『人間失格』の太宰治、それに石川淳、伊藤整らがそれである。かれらは既成のモラルや観念に反逆して、主観の燃焼にほとんど最高の価値を見出し、熱烈な行動をつみ重ねることだけを問題にした。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com